

## 第61回島根県保育研究大会

記念講演

### 『子育てハッピーアドバイス』

～自己肯定感を育む子育て支援を考える～

講師：真生会富山病院心療内科 明橋 大二 氏

「子育てハッピーアドバイス」の著者である明橋大二氏の講演では、子どもの自己肯定感を育むことがいかに大切か、そしてそのためにも保護者の自己肯定感を育むことが大切だということを、丁寧に話してくださいました。その概要を紹介します。

#### ○自己肯定感はどのように育つのか

自分のいいところを見つけてもらい、褒めてもらう。それで自己肯定感は育っていくけど、それだけではない。自分のだめなところ、悪いところ、あるいはマイナスの感情もひっくるめて受け止めてもらえる。それで初めて育つのが自己肯定感。

#### ○子どもの心は「依存」と「自立」を行ったり来たりして成長していく

依存とは甘えのこと、自立とは反抗のこと。この2つを行ったり来たりしながら大きくなるのが子ども。親に十分に依存して甘え、不自由さを感じるようになると自由を求めて（これが意欲）自立し始める。自立して自由になると、今度は不安な気持ちが生まれ、また依存を求めるようになる。そこで安心感を得るとまた自由を求めて…といったように、行ったり来たりしながら大きくなるのが子どもの心。

大事なことは、依存と自立の行ったり来たりは子どものペースでないといけないこと。子どもが「お母さん」と寄ってきたときは助ける。自分でやると言ったときは「じゃ、やってごらん」とさせてやる。子どものペースで行ったり来たりできることが大事。

自立の基礎となるのは意欲。意欲は安心感から出てくるもので、安心感には十分に依存し甘えることで得られる。つまり、甘えない人が自立するのではなく、十分に甘えて安心感をもらった人が自立するということ。

依存（甘え）と自立（反抗）を行ったり来たりしながら育つことを考えると、子どもが反抗し始めるのは依存して甘えて安心感を十分に得られたから。基本的にはそれまでの子育てが間違っていないことだ。

#### ○親への対応

今の子どももそうだけど、親も自己肯定感が低い。自分の否を認めず、全部保育園のせいにしてくるプライドの高い親もいるが、それは自己肯定感が低いから。自己肯定感の高い人は自分の否を認めることができるし、自分の至らないところを受け入れることができるもの。そんな親が子どもを褒められるようになるためには、まず親が周りから褒めてもらう必要がある。

子どもの支援、子育ての目標は、子どもの自己肯定感を育むこと。では子育て支援とは何かというと、親、特にお母さんの自己肯定感を育むことにつける。親の自己肯定感が育ってくれば、子どもの自己肯定感を育てられるようになる。

そのためにも親の話をしっかり聞き、親の気持ちを言葉にしてかけ、できているところを十分に認めることが大事。親を変えようとは思わないこと。親が変われば子が変わるとするのは事実だけど、あなたが変わらなければということは、今のあなたはだめだという否定のメッセージ。心配な親ほど、1%でもいいのでできているところを見つけて褒め、認めていく。そうすると信頼関係ができてくる。そこで初めてアドバイスができるようになる。

最後に、「まずは大人同士が互いのことを褒め合い、認め合うことが大事で、それができて初めて子どもたちのことを褒められるようになる。大人も子どもも互いのいいところを見つけて褒め合い、認め合う。互いの辛さ痛み悲しみに気づきあって、支え合う。そういう関わりを作っていってほしい。」と結びました。





開会行事



オープニング



フィナーレ

## 第1分科会

**提案者** 大田市保育研究会 **助言者** 元大田市立久屋小学校 校長／安藤 賢一氏

## もう1つの“間”「手間」から育つキラキラ☆スマイルおおだっこ ～「体を動かすってたのしいね」「うん、たのしいね」～

第1分科会では、約120名の参加者が16のグループを作り討議を行いました。日々の遊びを通して、子ども達の「動きの発達」を促す取り組みと、小学校との接続とその後の連携について議論されました。参加された先生方は、自身の日々の保育を重ね合わせ討議の中で盛んに意見を交わされ、特に小学校との連携について、市郡によって大きく差がある事から、複数の地域からの入学者が集う学校については、保育園からの取り組みを理解されていない事に悩まれる声も多くありました。

助言者の安藤先生から、本研究は子どもの理解に基づいた保育者の工夫や手立てがなされ、子どもの遊びがいかに深まるかを、共通認識と専門スキルを持って取り組まれた事を評価されました。

体を動かす事により心の健康にも直結しており、子ども達からの気付き→疑問→取り組み→気付きの連鎖を大切に、これからも経年の比較をして欲しいと課題も提示していただき、分科会が終了しました。

みどり保育園／岩倉 善光



## 第2分科会

**提案者** 邑智郡保育研究会 **助言者** 雲南市立西日登小学校 校長／梶谷 朱美氏

## 元気なからだの根っこづくり ～みんなでわくわく、ドキドキ体験～

第2分科会は、邑智郡保育研究会研究委員さんの補足説明、講師の雲南市立西日登小学校の梶谷校長先生による指導助言の後、グループワーク、講話という形で行われました。

グループワークでは、発表者の提案を受けて、参加者それぞれが感じたことや取り組みたいこと等をKJ法形式で書き、意見交換するというワークで、ざっくばらん雰囲気の中で話し合いが進められました。

助言者の梶谷朱美校長先生から、『自然豊かな町でもメディア視聴の多さや基本的な生活習慣が整わない、身体を動かすことが減ってきている等の現状が見られるが、保・小・中と続けて連携していけるのはよい。今、小学校で一番最初に教えるのは「和式トイレの使い方」。しゃがめない、ハンドルが押せない等、一昔前は生活の中で学んでいた動きがなくなっている。幼児期には多様な動きをひき出すこと、自発的な遊びとして取り組むこと、遊びこむことが大事で、できる、できないではなく、楽しく、できることを積み重ねる。「島根の自然」「暮らしや仕事」「大人が認めて語りかけて」「一緒にする」というキーワードで保育を考えよう』という学びの深い分科会になりました。

直江保育所／小村 成美





## 第3分科会

**提案者** 松江市保育研究会

**助言者** 松江市健康推進課  
管理栄養士長/  
片山 郁子氏

# おい歯く たの歯く 松江の子ども歯を守ろう

## ～調理担当者が保育所(園)でできる歯育の取り組み～

第3分科会では、松江市保育研究会の皆さんが取り組まれた『歯育』について、およそ90名の参加者が学び合いました。

グループ討議では、実践事例をもとに、それぞれの園で取り組んでいる『歯育』についてたくさんの意見が出され、『食育』に合わせ『歯育』の重要性が高いことを実感しました。また、食育教材や食育への取り組みの様子がよく伝わる展示も並び、意見交換と共に活気溢れる会場となりました。

助言者の片山管理栄養士長からは、「虫歯の有病率については横ばいが続いている。働くお母さんが増加しており、生活の場が家庭から保育園中心へとシフトしている中で、保育園で行う取り組みが大事」と話されました。乳幼児期からの“歯の大切さ”を保護者、保育士、調理が認識し、連携を取り合い工夫をしながら『歯育』に、取り組んでいくことが大切だと感じた分科会となりました。

布勢保育所/稲垣 仁美



**提案者**

さくらこども園 園長/福富由希子  
真砂保育園 主任保育士/永田 史江

## フリー発表 分科会

## 地域との関わり

「地域との関わり」というテーマでフリー分科会が行われました。江津市さくらこども園からは「イベント的な関わりから日常的な関わりへ」の発表、益田市真砂保育園からは「地域で育つ! 里山保育」の発表をしてもらい、その発表を元に各園の取り組みを考えるグループ討議を行いました。グループ討議では、今後どのような関わりを作っていけばいいかについて活発な議論が行われました。

グループ討議の中では、日々の忙しさからなかなか地域との関わりを作れないといった声もありましたが、その中でもできることを少しずつやっていくことから始めてはと、前向きなアドバイスも出てきていました。発表してくれた2園の取り組みの共通点でもあった、積極的に地域へ入り込み、多様な人との関わりを通して子どもたちが社会を学ぶための場を作ることをこれからの保育園・認定こども園に欠かせない視点だと再確認する場になったと思います。

あさりこども園/相山 慈



## 全国保育士会 研究大会 発表報告分科会

**提案者** 雲南保育協議会 奥出雲ブロック

# 地域の子育て家庭をどう支えるか

## ～家庭の子育て力につながる支援を探る～

去る10月26日～28日、全国保育士会研究大会が富山県で開催されました。第7分科会、保護者に対する支援を考える「地域における子育て支援」に、雲南保育協議会・奥出雲ブロックが、「地域の子育て家庭をどう支えるか～家庭の子育て力につながる支援を探る～」と題する研究発表を行ないました。県大会の報告分科会には43名が参加、その研究内容と全国大会の議論の経過、助言者である桜花学園大学教授小嶋玲子氏の講評について報告しました。

この研究は急遽昨年途中で決まり、1年にも満たない期間で関係者が総力をあげてまとめたものです。奥出雲町の平成17年から現在までの実践記録を丁寧に振り返り、数多くのエピソードから支援内容の変化を明らかにしています。雲南保育協議会の他の市町での実践も参考に、現時点で求められる子育て支援センターの役割を考察しています。

報告分科会では、この研究の詳細が全国保育士会研究紀要(2017年)に載っていて他に転載できないため、急遽研究の目的、方法、記録の整理・分析結果、エピソード記録などの概要を印刷、説明をしました。多くの質疑があり、子育て環境の変化、保護者のニーズに柔軟な対応をしてきたなかで、「子育て広報誌」と「出前保育」の役割が重要であるとの共通認識が得られました。他の関係機関との連携も効果の確かなものとしています。小嶋氏は、実践記録を丁寧に振り返り、量的な調査や数の論理からは見えてこない親子の姿を見出し、支援につなぐ努力を高く評価していましたが、私たちも性急な成果主義に惑わされることなく、多くの地域で参考にしたいものです。

あおぞら保育園/森山 幸朗



第61回島根県保育研究大会において45名の方々が表彰されました

～先輩からこれからの若い世代へメッセージ～

この度は、永年勤続表彰を頂き有難うございました。思えば、保育という仕事に就いたのは今からちょうど20年前。先輩の先生方に沢山ご指導をいただいたこと、今でもよく覚えています。私は13年前、今の職場に変わったわけですが、今でも保育で悩んだり、立ち止まった時には、その当時のことを思い出して参考にしています。そして、今の職場では、結婚、出産、子育てと一番大変な時期でもありましたが「保育士の代わりはできても、母親の代わりは誰もできないから」と、育休や我が子のことでの休暇を職場が快く理解してくれました。また、家庭のことで半年間休暇を取らなくてはいけなくなった時にも理解がありました。仕事に復帰するところがあるということは、とても安心することができ、家庭のことに専念することができました。日々保育の中で、乳幼児期からの親子の関わりを大切にしていますが、我が子にも気持ちにゆとりをもって関わり、安心して子育てをすることができたことを大変感謝しています。

保育では、容易ではないこともあります。一生懸命向かうと、子どもも必ずこちらを向いてくれ、日々成長していく子どもたちの姿と、日々変化していく子どもと自分との関係に手ごたえとやりがいを感じています。

この20年間で学んだことは、『自分は一人ではないこと。自分の力を信じること。仲間を信じること。』です。この表彰を頂いたことを胸に、まわりの方々への感謝の気持ちを忘れずに、そして今までまわりの仲間や家族に支えもらった分を少しでも返返しにいけるよう頑張りたいと思います。

出雲／出雲サンサン保育園 松原 綾

短大を卒業し、資格を取得し、今の職場にお世話になり始め16年以上が過ぎました。子どもが好きで、子ども達の為に何かしてあげたい、役に立ちたいという気持ちで始めたこの仕事でしたが、勤め始めた数年はやりたい事が思う様に出来ず、もどかしさや、悔しい気持ちで一杯になることが沢山あり、このやり方で良いのだろうか、このままで大丈夫なのだろうかと自問自答を繰り返していました。そういう時、やはり力になって下さったのは園長先生、主任先生を始めとする同じ職場の職員の方々でした。的確なアドバイスを下さったり、意見交換をしていく中で良くない所を改善し考え直す事が出来、前向きに、そしてより楽しみながら続けてこれました。もちろんまだまだ未熟な点、改善する所、学ぶべき所もあると思います。保育士としてこれからも頑張っていこうとする皆さん、自分の理想と違ったり、思う様にならなかつたりで悩む事、折れそうになることが時にはあると思います。そんな時には一人で抱え込まず、恥ずかしがらず周りの方々の力を借ります。必ず光が見えてきます、そしてその光が大好きな子ども達の笑顔を沢山見せてくれますよ。笑顔が次へのやる気をくれますよ。

益田／すみれ保育園 山崎 勇

なりたかった保育士として働きはじめて20年が過ぎ、この度第61回島根県保育研究大会において、永年勤続の表彰をいただきました。

保育士になったばかりのころは、子どもたちや保護者さんとうまく関係がつかず、悩んで涙することもありました。でもそんな時、同僚の保育士の先生たちが悩んでいる私の姿に気づいて励ましてくれたり、悩みをきいてくれたりして、とてもうれしかったことを今でも覚えています。保育士は、人とのつながりが何よりも大切な仕事だと思います。私の保育園では、卒園した子や保護者さんたちが成長の節目ごとに会いにきてくれます。卒園した後も保育園での思い出が繋がっていることがとてもうれしいのです。子どもたちはもちろん、保護者さんや同僚の先生たちといつになっても一緒に笑って、喜んで、時には悩むことができる、そんな保育士でいたいと思います。

大田／あゆみ保育園 土江 百恵

勤続15年の表彰をして頂きありがとうございます。

15年の表彰と聞いて、ついこの間保育所に勤めたと思っていたが、もう15年と自分でも驚いています。

私は、保育所の前に老人ホームの調理をしていました。老人食12年、幼児食15年食に携わってこんなに月日が過ぎたのだと改めて振り返る事が出来たように思います。

若いころ、先輩方に「若いから今から長く働けるよ」と言われ、この先長いけど続けられるか不安でした。もちろん、辞めたいと思ったことは何度もありました（試練は時々訪れます）よく乗り越えて来られたと思います。悩んだ時に愚痴や悩みを聞いてもらった先輩、上司がいてくれたから次の日もがんばれたと感謝しています。

話を聞いてもらえるだけで、気持ちが楽になります。

保育所の給食業務は日々、時間に追われ辛い時もありますが、メニュー作成をし、子どもと一緒に食事をするという流れの中で子どもの反応が一目でわかります。「おいしかった!また作って」には続けてよかったと思えるひとときです。とてもやりがいのある仕事だと私は思っています。定年まであともう少しありますが、子どもや職員と楽しく過ごしていきたいです。

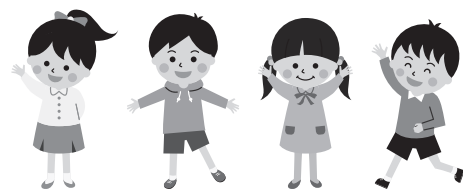
江津／敬川保育所 千代延 依子

第62回島根県保育研究大会



第62回島根県保育研究大会は出雲市で開催予定です。よろしくお祈りします。

期日：平成30年  
11月17日(土)  
場所：出雲市民会館



編集後記

あつという間に師走。いつもの事ですが1年が早く感じます。皆さんは、いかがお過ごしでしょうか？12月になると、子どものように何かワクワクしますが、現実には「仕事」でも「家庭」でも大忙しで新年を迎えてしまうのではないのでしょうか。そんな師走の中今年一年を振り返りながら、保育に関わってこられた会員の皆様方、お疲れ様でした。そして、ありがとうございました。どうぞ良い年をお迎えください。くれぐれも、食べ過ぎ、飲み過ぎないように。